ひささ池の白うなぎ ― 本郷 ―

　昔、むかしのことです。

　本郷の村がすごい日照りにみまわれていました。宮川も櫛田川も、ごつごつした川底を見せ、雨水をためる桶（おけ）はどれもすっからかんです。

　田の水も、飲み水もなくなり、村人たちは困っていました。

　こうなれば、雨ごいでもして、神様にお願いするより方法がないということになりました。

　それから毎日、雨ごいをしましたが、どれだけ待っても一粒の雨も降りません。皆は思案（しあん）に暮れていました。

　ある日、村の吾作（ごさく）じいさんが山へきこりにでかけました。うだるような暑さに、吾作じいさんは、水をもとめて池のある方へと歩いていきました。

「ああ　やっぱりこの池にも一滴の水もない。」

　吾作じいさんは、がっかりして、ひたいの汗をふきました。

その時、

「おや！」

と驚きました。底の見えている池に、一匹の白うなぎが、息も絶え絶えになっているではありませんか。

　吾作じいさんは、
「かわいそうにのー。」
と言って家へ持って帰りました。
　そして、自分が飲みたいのを我慢して残してあった水の中に、白うなぎを入れてやりました。みるみるうちに、白うなぎは元気に泳ぐようになりました。
　すると、白うなぎを助けてくれた、吾作じいさんのおかげで、雨が降ってきました。それはそれは、たくさんの雨でした。
　村人たちは、とびあがって喜びました。
　そして、白うなぎを助けてくれた吾作じいさんにお礼を言いました。
　吾作じいさんは、白うなぎをひささ池へにがしてやり、それからというもの、このあたりは水不足に苦しむということはなくなりました。
　ひささ池は宵(よい)の明星が写るという程、きれいな水が湧き出て、伊勢神宮の土器を調製するのも、ここの水を取って使われました。

ひささ池

キーワード：みんわ、新茶屋、伊勢街道

このお話は、昭和56 年に発行された書籍『明和のみんわ』(野田那智子さん編著)をもとにし、登場する人物・建物・その他の名称・読み方などは、原文をしようしています。